

“wiki 形式”社会情報系ゼミナールの試み

社会科教育・矢澤 知行

## 1. 授業の形式

本授業は，教育学部・情報文化課程・情報教育コースにおけるゼミナール形式の授業である。

授業の目的は，情報教育コースの社会情報系の授業で培った基礎的知識をもとにして，各自の研究テーマを設定し，社会情報にかかわる学習を深めることに置かれている。また，到達目標として，社会情報学に関する基本的文献を読みこなす力を身につけ，この分野にかかわる具体的な議論を展開できる，という点を掲げている。

授業科目としての「社会情報系特講Ⅱ」は本来，2回生対象であるが，実際には，「社会情報系研究Ⅲ（4回生対象）」および「社会情報系研究Ⅰ（3回生対象）」と合同で開講しており，これら3科目の総受講者が，社会情報系担当の教員6名のいずれかのゼミナールに属する，という形式を採用した。つまり，各ゼミナールの構成メンバーを決めるにあたり，学年別の“ヨコ割り”ではなく，2～4回生を含む“タテ割り”の方式を取り入れたのである。

報告者の主宰するゼミナールに属した学生6名は，いずれも情報教育コースの学生であり，学年の内訳は次の通りである。

- 2回生・・・3名
- 3回生・・・1名
- 4回生以上・・・2名

## 2. 授業の内容

授業の内容は，各ゼミナールを主宰する教員に委ねられている。報告者のゼミナールでは，鈴木謙介『ウェブ社会の思想』（NHK出版，2007年）の内容検討からはじまり，受講者どうしの議論を通じて，現代社会におけるメディアの多様化が，人々のコミュニケーションにどのような影響を与えるのか，という点について理解を深めることをめざした。

毎回の授業は，いわば“wiki形式”で行っ

た。wikiとは本来，ウェブツールの一種で，ウェブページの作成や編集をウェブブラウザ上から誰にでもできるコンテンツサーバを指す。こうしたウェブ上の自由参加型の概念を，ゼミナールの運営に活かすことをめざした。

毎回の授業の進行形態は，およそ次のようなものである。

- ①各受講者の研究報告
- ②報告内容に即した自由討論
- ③次回の研究課題決定

毎回の授業の最後に，次回の研究課題を決めると同時に，その研究課題をいくつかに細分化し，各々の研究分担者を決めた。受講者は各自の分担事項についてリサーチを行い，その内容を次回の授業で報告するという形式を取った。

授業を進めるにあたり，ゼミナールの主宰者として最も意識したことは，学生の主体性を尊重することである。例えば，授業の進行をつかさどる司会者は学生の互選によって決めた。また，討論の内容，研究課題の設定，研究分担の内容なども，すべて受講生どうしの議論を通じて決めるようにした。一方，教員は，討論の趨勢を見てときおり軌道修正をしたり，議論が停滞したときにアイデアを出したり，資料収集にあたって助言をしたりするなど，できるだけ裏方に徹した。

また，重要なのは，毎回の授業時に“書記”を配置したことである。全員が見える位置にPC画面を置き，書記を務める学生が，その日の議論の内容を逐一書き留め，授業の最後にその“議事録”を全員に配布することにした。そして，最終回に，それら“議事録”の蓄積を総合し，編集して，半期のゼミの成果とすることをめざした。これが“wiki形式”の由来である。ウェブサーバを介して編集を行う本来のwikiとは異なるが，face to faceの議論を踏まえつつ，その場で何らかのアウトプットを出し，議論の蓄積を反映させながら，より洗練度の高いものにしていくという意味において，“概念としてのwiki”をゼミナールの場で実現しようとしたわけである。

### 3. アンケートの実施と質問項目

本報告書を作成するにあたり、「授業改善のためのアンケート」を実施した。全15回の授業の最終回にあたる2008年1月23日に実施し、当日出席していた5名に協力してもらい、そのすべてから有効な回答が得られた。

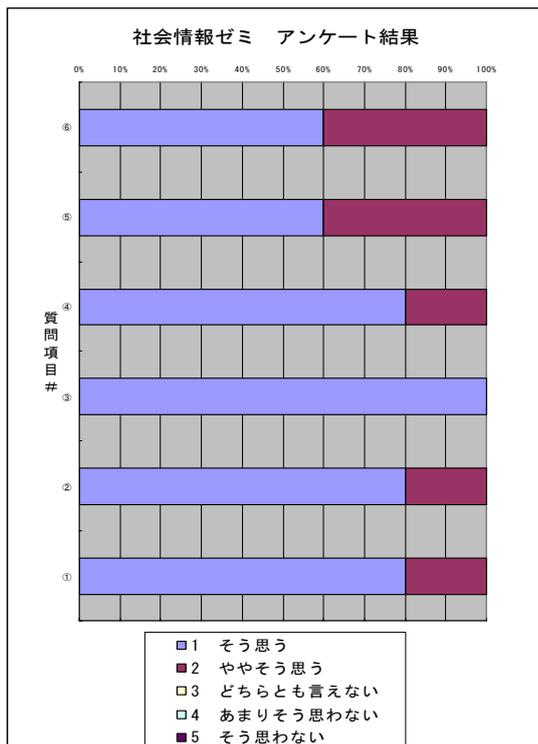
アンケートの質問項目は下記の6点であり、いずれも5段階評価による調査を行った。また、授業に対する感想や具体的な要望を記入するようための自由記述欄も設けた。

#### 質問項目

- ①【あなたの意欲】この授業に積極的に取り組んだ。
- ②【関心・興味】この授業で取り上げられた事柄について、関心・興味がわいた。
- ③【有用性】授業内容は自分の将来の進路、人生にとって役立つと思う。
- ④【教員の意欲・熱意】教員の授業に対する意欲・熱意を感じた。
- ⑤【満足度】本授業は全体として満足のいくものだった。
- ⑥【おすすめ度】本授業の受講を他の学生や後輩にすすめたい。

### 4. アンケートの結果

アンケート結果を集計し、その結果を整理して示したものが下のグラフである。



### 5. 総括と今後の課題

アンケートの全項目において、「1. そう思う」と「2. ややそう思う」との回答が得られ、自由記述欄においても、おおむね肯定的な評価が得られた。

社会情報系のゼミナールでは、これまで、さまざまな授業の試みが行われてきた。その一例が、複数教員（2～3名）による受講生20～30名規模のゼミナールである。授業の内容としては、文献の講読を中心に据えた輪読形式のものが多かった。しかし、こうしたケースの場合、報告担当者以外の受講生が授業に関与する度合いは総じて低いという点が懸案となっていた。

本授業のように、文献講読を端緒としながら、受講者どうしの討論や、“wiki形式”のアウトプット作成に重きを置くというのも、社会情報系ゼミナールの一つの試みといえよう。

アンケートの自由記述では、“討論型のゼミでは、他人のいろいろな意見を聞くことができ、また発言の場もあるのでよい”、“個々が主体性をもって行う点がよい”といった評価が得られた。また、“ゼミの人数は8人までが理想”、“着座形式は円卓がよい”、といった具体的な意見もみられた。

ただ、一点だけ、大きな課題が残された。それは、ゼミナールで培った成果を、外部に対して公表する機会がなかった点である。従来は、社会情報ゼミナールの最終回に、各ゼミが集って研究成果報告会、もしくはシンポジウムを開催するケースがあった。しかし、今回は各ゼミの足並みが揃わなかったため、それが実現せず、報告者が主催するゼミナールの学生たちの期待に添うことができなかった。社会情報系の各ゼミがそれぞれの個性を発揮するためにも、研究成果を互いに公表することは重要であると思う。

最後に一点。ゼミナールにおける最大の成果ともいえる“議事録”を、実際にウェブ上においてwiki形式で実現すればよい、との意見が学生から寄せられた。もちろん技術的には可能である。今後の課題としたい。